

治療を施せば完治できる病気なのである。しかし、子宮頸部高度異形成を示す CIN3 の治療では子宮頸部円錐切除術を行うため、患者は不妊や早産に至るリスクを負う可能性がある。このようなリスクを伴わない安全な治療法を確立するためには、子宮頸部軽・中度異形成を示す CIN1/2 へ発展するメカニズムを明らかにする必要がある。

hWAPL は CIN や squamous cell carcinoma (SCC) で発現が亢進し、ヒトの子宮頸癌細胞を用いた実験では HPV 由来 E6E7 の発現に影響を受け、腫瘍形成に関与することが報告されている。本研究では、マウスの子宮頸部でヒトのホモログである Wapl を高発現させることで CIN を模するモデルマウスを作製し、子宮頸部上皮細胞が CIN へ発展するメカニズムの一端を明らかにした。Wapl はエストロゲンの影響下で Esr1 のコアクチベーターである MacroD1 を NF- κ B 複合体へ取り込ませ、Myc と Cyclin D1 を活性化させることで CIN を引き起こす一因を担っていることを提唱する。

P2-22.

唾液腺癌に対するカルボプラチン、ドセタキセル併用療法に関する後方視的研究

(耳鼻咽喉科頭頸部外科)

○岡田 拓朗、塚原 清彰

(松戸市立総合医療センター 化学療法内科)

五月女 隆

(東京医科大学病院 病理診断科)

長尾 俊孝

(国際医療福祉大学三田病院 頭頸部腫瘍センター)

多田雄一郎、三浦 弘規

【背景】再発転移唾液腺癌に対する標準的な化学療法は確立していない。過去にはシスプラチンを含む治療法の報告が散見される。本研究の目的は、シスプラチンよりも毒性が少ないとされるカルボプラチンと、過去の報告の少ないドセタキセルとの併用療法について、効果と安全性について検討することである。【対象と方法】2011年から2018年の間に再発転移唾液腺癌に対してカルボプラチン、ドセタキセル併用療法を行った症例を後方視的に解析した。カルボプラチンは AUC 5、ドセタキセルは 70mg/m² で day1 に投与し 3 週毎に最大 6 コース投与した。

治療効果判定は Response Evaluation Criteria in Solid Tumors version 1.1 (RECIST 1.1) を用いて行った。有害事象の評価は Common Terminology Criteria for Adverse Events (CTCAE) ver4.0 を用いて行った。対象例について病理組織像の解析も行った。生存率の解析は Kaplan-Meier 法を用いた。【結果】対象は 24 例であった。観察期間は中央値 19.7 か月 (範囲 2.2 ~ 64.3 か月) であった。組織型は唾液腺導管癌 12 例、腺癌 NOS 4 例、筋上皮癌 3 例、腺様嚢胞癌、粘表皮癌、腺房細胞癌、基底細胞腺癌、低分化癌が、それぞれ 1 例であった。24 例中 18 例 (75%) で 6 コースの投与が完遂できた。治療効果は CR 2 例、PR 8 例、SD 9 例 (long SD 3 例)、PD 5 例で奏効率は 41.6% (10 例) であった。病理組織別に最も症例数の多かった唾液腺導管癌では、CR 2 例、PR 4 例、SD 3 例 (long SD 1 例)、PD 3 例で、奏効率 50.0% (6 例) であった。全症例での progression-free survival 中央値は 8.4 か月、overall survival 中央値は 26.4 か月であった。Grade 3/4 の有害事象として、好中球減少、貧血が約 20~30% の症例で認められたが、管理は可能であった。【考察】再発転移唾液腺癌に対し、カルボプラチン、ドセタキセル併用療法は一定の効果があり、認容性も高く、治療選択肢の一つとなりうると考えられた。

P2-23.

人工物乳房再建後・乳頭局所皮弁再建 (Clover-flap 法) の術後 3 年経過時乳頭高に影響する因子解析

(形成外科)

○小宮 貴子、松村 一

(茨城医療センター：乳腺科)

海瀬 博史

(八王子医療センター：乳腺科)

山田 公人

(乳腺科)

石川 孝

※抄録の掲載を辞退する。